

千里地理通信

関西大学地理学・地域環境学教室会報 第94号

Newsletter of Department of Geography and Regional Environment, Kansai University

Contents

Page 1 ……

巻頭随想

黒木貴一

Page 2

卒業生だより

地理学・地域環境学専修での学びの先～旅行会社での仕事と出会い

吉村虎太郎

Page 3 ……

日帰り巡検報告

兵庫県西宮市と宝塚市の思い出

上山結生・木村紫野

Page 4-5 ……

研究ノート

地方都市における公共交通ネットワークの役割と維持

眞 嘉誠

Page 6-7 ……

実習調査報告

松山実習報告

厚東 隆

Page 8 ……

大学院生の研究業績
2026年度教室行事予定

Page 9 ……

学窓から

私の眼に映る地理学

郝 玉朋

令和7年度会計報告

Page 10 ……

同窓会事務局ニュース
教室創設60周年
記念事業

Page 11 ……

教室だより

Page 12 ……

随想

ドイツでの研究滞在の記録

寺床幸雄

Page 8-11 ……

2025年度
卒業生・修了生からの
ひとこと

Page 11 ……

新専修生からのひとこと

日本地理学会の開催と地理

黒木 貴一

秋学期の近づく9月末になると、あの日本地理学会の大会を思い出します。その始まりは6年前の本学着任の日(2020年4月1日)で、野間先生から薄っぺらな封筒を頂戴した時でした。封入物は、2020年3月27日付の野間先生宛の「2023年日本地理学会代議員会および秋季学術大会開催について(お願い)」というたった1枚の重量級の紙でした。その後、コロナ時代が到来し、変則的な大会が継続され、その終焉までに3年の月日が流れました。何時の頃からか自身は、大会実行に至る流れの中心にいました。ただ近畿地方の先生方との面識はほぼ無く、学会の大会運営の経験も同様で、そしてコロナ時代。結果、3年経過しても大学や周辺状況の理解は進まず準備手順など皆目見当がつかえません。まずは客観的観察をと2022年秋季大会(香川)に赴き、何とかしたいスイッチが点滅か淡い点灯状態となり、2023年春季大会(東京)に赴き、ようやくそれは点灯したでしょうか。

開催までに順次作成していったファイルの作成日時を基に大会開催を地理的に振り返ってみます。前2大会の観察結果から2023年春休み頃には、大会運営の2つの要点が理解できました。1つは①参加者や学生アルバイトなど人の、大会参加や出展や巡検ではお金の、会場の設営では物の3流れがあり、1つは②会場設営と撤収、人材配置と調整、物品調達と管理、懇親会等の雑多な庶務、それらのバックグラウンドとなる会計の5業務がある要点です。そこで実行委員会の組織は、自分は人担当、土屋先生が物担当、松井先生がお金担当の基本を作りました。次に院生組織を業務に対応させ5つ作りしました。それぞれ黒木の元に、会場設営担当、人材配置と調整担当を置き、土屋先生の元に、物品管理担当を置き、松井先生の元に庶務担当と会計担当を置いて、その5担当にそれぞれ学部生を所属させる姿としました。

4/3 大学院の入学式で、在校生含め全院生が揃う稀有な機会に組織作り着手しました。この時、土屋、松井、黒木を筆頭とする5業務に対し、それぞれ2名の院生をリーダーとして付属させ、彼らに業務を説明し大会に向かう意識を持たせました。実際、1年前の2022年7月から会場のE棟とD棟の教室予約に動き始めましたが、キャンパス通行や教室使用等の制約情報が次々に入り、10か月後4/15にようやく

③会場までの案内図や部屋配置図をpptxファイルで作成できました。4/19に、泉南地方巡検を担当いただく教室OBG先生方が来校され、大会打合せを兼ねて、大会実行委員会を立ち上げました。つまり上記5業務に巡検業務を加えた実行委員会が形成されたました。その後は、大会での④受付、口頭・ポスター発表、委員会、出展、懇親会等の作業別に、人、物、お金の流れについてシミュレーションを重ねました。結果、ポスターパネルの移動と懇親会は生協、出展は生協を通じたヤマト運輸、委員会への弁当はパンセ、託児所は子育て広場ねっこぽっこ、に外注依頼し、それ以外を実行委員会及び学生で運営することにしました。6/15院生向けの説明会では、会場での日・時による人や物の配置や移動の詳細な空間利用イメージをpptxファイルで90分説明しました。ここで業務各リーダーは個別作業の具体イメージを把握できました。その後、託児所、広報、出展、予算に関し本部と相談を重ね、7月中旬の大会プログラム確定(口頭発表109件、ポスター発表41件)、7月末の研究グループ(12件)や委員会(13件)の確定の頃から、準備作業は一気に進みだし、来客数を450と見積もり、部屋の使用数が確定できました。アルバイト学生の5業務の振り分けも行いました。7/29夏休み直前に、大会実行委員会からアルバイト学生へ大会進行説明を行い、続いて院生リーダー主導で学部生への業務説明とスケジュール確認作業を行って、準備作業の山場を越えました。その後、予約確定と細かな準備が次々に進み、大会当日を迎え、会計受付、ポスター発表、口頭発表、委員会、懇親会、巡検等、日常の学会風景が展開されました。

すでにお気づきかと思いますが、人、物、お金の動き①は私たちの社会の骨格、業務②は自治体などの社会の縮図、③は地図、④は土地利用として、アナログカルには地理空間に見えます。これが大会運営の設計思想とした、大会の見方・考え方でした。地理は空間の姿を明らかにすることに特化したため、ある時、衰退の地理学、と揶揄されたこともありましたが、ただ最近では、持続可能な社会の構築へ地理が貢献できることのアピールが増えてきました。さて小社会の日本地理学会2023年秋季大会は、持続可能な評価を得られたのでしょうか、将来の振り返りを待ちたいと思います。陰で支えてくださった野間先生、時間を惜しまず協力いただいた実行委員会の皆様及び学生諸君に遅くなりましたが心より感謝いたします。

(くろき たかひと：本学教授)

地理学・地域環境学専修での学びの先～旅行会社での仕事と出会い

吉村虎太郎

2025年3月に関西大学文学部を卒業し早半年、私は現在名鉄観光サービスという旅行会社に勤めています。弊社は愛知県名古屋市に本社を置く旅行会社ですが、私は現在、西梅田にあるオフィスに勤めております。特に教育旅行とスポーツ旅行に携わっており、普段は学校の宿泊研修や修学旅行の企画提案、体育会系の部活動が行う合宿の手配などを行っています。決して「楽」な仕事ではありませんが、非常に「楽しい」と思える仕事です。

私が関西大学へ入学したのは2021年4月のこと。私が高校2年生の頃から流行していたCOVID-19の影響をぬぐい切れない日々でした。併設校出身の私はかねてより地理学・地域環境学専修に興味を持っており、倍率の高かった文学部へなんとか推薦で進学しました。期待を胸に臨んだ大学生活でしたが、待ち受けていたのは緊急事態宣言の発令と解除によって授業がオンラインか対面かが切り替わるという日々。自粛生活の中で、自宅と大学のみを往復するだけの日々が続いていました。

そのような日々も過ぎ、この専修へ配属された2回生の春。少しずつ自粛ムードも薄れ、私の想像していた「大学生活」を送れるようになりました。特に、専修へ配属されてから初めてバス巡検で向かった滋賀県の長浜や、福井県の三方五湖の景色は今でも鮮明に覚えています。マスクなしで生活できるようになった3回生からは自発的に旅行に行く機会も格段に増え、気が付けば2回生から4回生までの3年間のみで47都道府県すべてを旅行していました。

そんな私は卒業論文では「北陸新幹線延伸開業における敦賀市の観光業—延伸開業の影響と新たな需要について—」というテーマで執筆を行いました。ちょうど2024年3月に北陸新幹線が金沢敦賀間で延伸開業したタイミングであったため、旅行業界に携わる人間として適当なテーマであると判断しこれを選びました。指導教員である筒井先生からは時に厳しいお言葉もいただきましたが、自分が学んできたことをしっかり生かし切ることができたものだったと振り返ります。

大学で学んだ地理の知識を生かせる仕事に就きたい。かねてよりこのように考えていた私は、旅行会社へ就職する道を選びました。社会科科目の教員免許も取得していたため、中学校か高校の教員になる道も選択肢の一つでした。実際に入学当初はそのように考えていたため、



写真 沖縄・古宇利島のハートロック

教員免許の取得を目指していました。しかし、そのような中で旅行会社の道を選んだのは、この専修での学びがきっかけでした。巡検で様々な場所で研修を行ううちに「教科書の写真よりも生の景色を見て欲しいと思い」という、私なりの考えを持つようになりました。その夢を追い求め、この業界に飛び込みました。

「旅行会社での仕事」と聞くと、どのようなものを思い浮かべるでしょうか。実際のところ、日常的に行っているものは外回り営業やオフィスワークといった地道なものです。しかし、何よりイメージしやすいのは「添乗」の仕事ではないでしょうか。添乗とは国内外の旅行に同行し、お客様の案内や旅程の管理などを手助けする仕事です。私は主に教育旅行、とりわけ修学旅行へ添乗することが多いです。中でも、私が担当している地域の中学校は修学旅行で沖縄へ向かうことが多いです（写真）。まだ仕事はメインの添乗員のサポートですが、ある月には2週間間隔で沖縄へ向かったりもしました。毎度生徒からからかわれて色々大変ではありますが、生徒様の一生の思い出になるような旅行を作るお手伝いをしているということは私の誇りです。

「長き歴史」、「重き使命」、「高き権威」。これらは学歌において、大学名と共に歌われる言葉です。関西大学を卒業して社会に出て、これらの言葉の意味が日々仕事を通じて理解できるようになってきました。これからも大学で学んだ地理学の知識を、旅行会社の社員として少しずつでも還元していく所存であります。

(よしむら ことろう：名鉄観光サービス株式会社、2025年3月卒業)

■ □ 日帰り巡検報告 □ ■

兵庫県西宮市と宝塚市の思い出

上山 結生・木村 紫野

2025年9月28日に兵庫県西宮市と宝塚市で日帰り巡検が実施された。本巡検では阪急西宮北口駅近くにある西宮市立中央公民館で集合し、西宮に関する説明が行われたのち西宮ガーデンズで1983年当時の西宮北口駅周辺ジオラマを見学した。その後宝塚市で再集合し、宝塚に関しての説明の後手塚治虫記念館を見学した。本稿では巡検で行われた説明を基に実際の経路に沿って印象に残ったことを報告したい。

まず集合したのは、西宮北口駅近くの西宮市立中央公民館である。西宮北口駅は阪急神戸線と阪急今津線との接続部に当たる乗換駅である。駅周辺は高級住宅地としてのブランディングが行われている場所であり、北西部には西宮七園と呼ばれる高級住宅街のうち二つの地区が存在している。また駅の南側には1986年からの再開発以降、公共施設や大型商業施設が立地している。今回集合した西宮市立中央公民館も駅の南側にあり、周辺は幅広い道路や駅前大きなロータリーなどゆとりのある空間が印象に残っている。また、阪神・淡路大震災以降建て替えられた比較的新しい建物も多く、ゆとりのある空間設計も相まって高級感のある街並みとなっていた。

西宮ガーデンズで昼食をとった後、阪急今津線で阪急宝塚駅へ向かった。初めに停車した駅は門戸厄神駅であり、近くにある門戸厄神の最寄り駅となっている。門戸厄神は厄除けで有名な寺院であり、段丘のへりに立地している。過去個人的に門戸厄神を訪れる機会があったのだが、境内から市街地を見渡すことのできる見晴らしの良い景色が印象に残っている。次の駅は甲東園駅であり、この地域は先ほどの西宮七園のうちの一つとなっている。西側の車窓を眺めていると山頂部が丸い形をした甲山が確認できた。甲山は火山岩頸という形成物による地形であり、周囲の山に比べて地表がなだらかなことが特徴である。その後同じく西側の車窓を見ていると西に向かう急な坂道が線路に沿って続いており、段丘崖を実感することができた。東側には重賞レースやG1レースも行われる阪神競馬場があるのだが、残念ながら視認することはできなかった。宝塚南口駅を過ぎ宝塚駅に近づく一気に街並みが一変した。この周辺の地域は観光プロムナード地域とされ、西宮市による景観計画に沿った建築となっている。クリーム色の外壁に赤い瓦で統一されており、異国情緒あふれる華やかな街並みとなってい

ることが一目見てわかり非常に心が躍った。

宝塚駅で再集合後、手塚治虫記念館と宝塚市立文化芸術センターに向けて宝塚を歩きつつ、その街並みを実際に目で確認した。宝塚といえば、宝塚歌劇団が連想される。そのイメージを裏付けるように、街のいたるところに宝塚歌劇団のポスターが貼られ、街並みがテーマパークのようにロマン情緒あふれる建築で統一されるなど、一般的な都市とは異なる景観が広がっていたのが印象深かった。

手塚治虫記念館と宝塚市立文化芸術センターに到着後、2つの施設の間にある広場（写真1）で説明の続きが行われた。その後、手塚治虫記念館の中に入り、宝塚出身の漫画家である手塚治虫の功績を学んだ。館内には手塚治虫の作品が並んだ本棚があり、観覧者は自由にそれらを読めるようになっている。子供がそのうちの一冊を手にとって読み込んでいたのが、時を超えて人を引きつける力を持ち、いまだ根強い人気を獲得している手塚治虫作品の魅力が垣間見たようで印象に残っている。

記念館をあとにして、清荒神の方面まで歩いて街並みを観察し、その日は解散となった。その後は、清荒神駅前の商店街を見学する者、清荒神まで参拝をしに行った者など、各々満足のいくまで周辺地域を探索し、帰路についた。春に続いて2度目の巡検であり、また自分たちが主体となって行うものとしては初めての経験であったが、また1つ代えがたいフィールドワークの経験を積むことができた貴重な機会となったことを喜ばしく思う。

（うえやま ゆう・きむら しの：学部2年次生）



写真1 宝塚市立文化芸術センターの広場

地方都市における公共交通ネットワークの役割と維持

—富山県高岡市を例に—

虞 嘉誠

1. はじめに

地方都市においては、人口減少と高齢化の進行に加え、自家用車利用を前提とした都市構造が長期的に形成されてきた。その結果、日常生活における移動手段として公共交通の重要性が指摘される一方で、実際には多くの生活行動が自家用車に依存しており、公共交通が十分に機能していない場面も少なくない。特に、高齢者や学生、自家用車を利用できない人々といった交通弱者にとって、日常的な移動環境の確保は生活の質に直結する重要な課題である。

そこで本研究では、地方都市における日常生活環境として、「買い物」「通学」「通院」という三つの行動環境に着目し、それぞれにおいて公共交通がどの程度実効的な移動手段となっているのかを明らかにすることを目的とする。事例として富山県高岡市を取り上げ、公共交通の徒歩圏と人口分布、生活関連施設の立地状況を空間的に整理するとともに、施設の駐車場整備状況などを通じて、自家用車利用を前提とした生活構造の実態を検討する。

2. 買い物環境

買い物は日常生活において高い頻度で発生する行動であり、とりわけ自家用車を利用できない交通弱者にとっては、移動手段の確保が生活利便性に直結する重要な要素である。

図1に示すように、中心市街地を含む居住誘導区域内的の買い物施設は、いずれも幹線道路沿いに立地してお

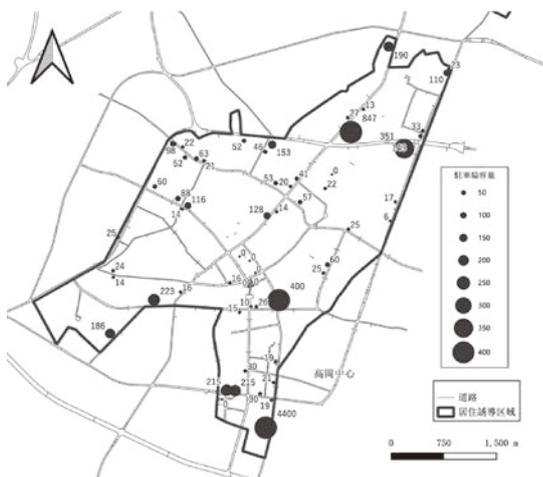


図1 高岡中心居住誘導地域における買い物施設の駐車場容量 (目視推定) (フィールドワークより作成)

り、来訪者が自家用車を利用しやすい空間構造を有している。特に市街地から離れるにつれて、駐車場の設置数は増加傾向にあり、郊外の施設ほど大規模な駐車場を備えていることが確認できる。

一方、中心市街地の買い物施設では、土地利用上の制約などから、駐車場を設けていない施設や、駐車可能台数が非常に限られている施設も見受けられる。このことは、施設立地条件の違いによって、自家用車によるアクセス条件に差異が生じていることを示している。

表1 各買い物種類の駐車台数の平均値

	駐車台数 総数	施設総数	平均値
コンビニ	456	28	16.3
スーパー	2841	14	218.5
ドラッグストア	1243	18	69.1

注：スーパーにはイオンスタイル高岡南(4400)が含まれていない

(フィールドワークより作成)

また、表1に示した各買い物施設の駐車台数の平均値からは、スーパーの平均収容台数が281台と非常に多く、多くの施設が自家用車による来店を前提とした立地・設計となっていることがうかがえる。ドラッグストアやコンビニエンスストアはスーパーほどの駐車台数ではないものの、交通利便性の高いロードサイドに立地しており、自家用車利用を前提とした利用形態であると考えられる。

以上の分析から、高岡市における買い物環境は、自家用車利用を前提として形成されている側面が強く、公共交通が主要な移動手段として機能する余地は限定的であるといえる。そのため、自家用車を利用できない高齢者や障害者などの交通弱者にとっては、徒歩や公共交通による日常的な買い物行動が困難となる可能性がある。

3. 通学環境

通学は日常的かつ継続的に行われる生活行動であり、移動手段の安全性や安定性が学習環境に直接影響する重要な行動環境である。

図2に、高岡市内の中学校および高等学校の立地分布、公共交通の徒歩圏、ならびに小地域別の10～19歳人口の分布を示す。市内には高等学校が10校、中学校が11校設置されており、その多くは公共交通の徒歩圏内に位置している。一方で、高等学校1校、中学校4校は徒歩圏外に立地しており、公共交通による通学が困難

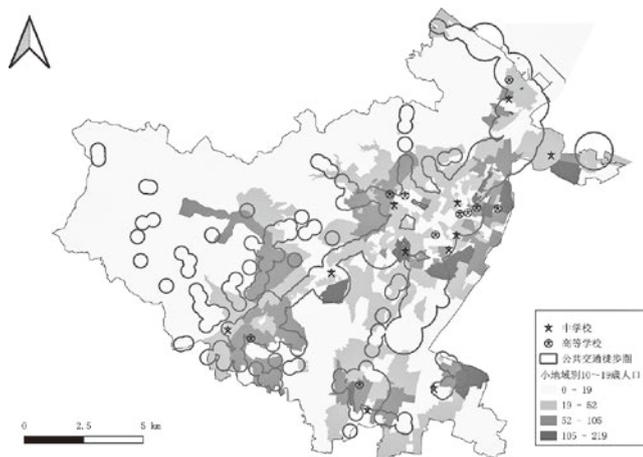


図2 高岡市10～19歳人口と学校の分布
(国土数値情報より作成)

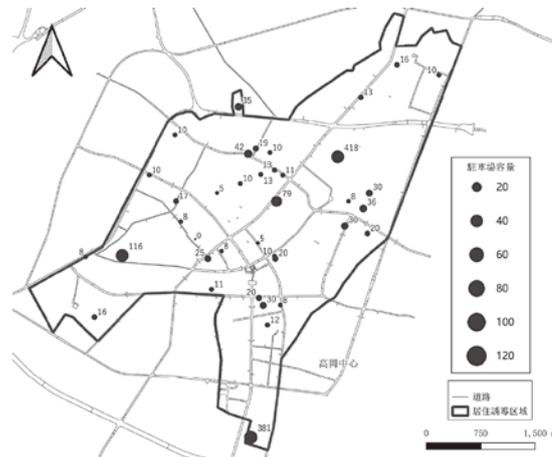


図3 高岡中心居住誘導地域における医療施設の駐車容量
(目視推定)(フィールドワークより作成)

な学校も一部存在する。

徒歩圏外に位置する学校や、10～19歳人口が多く分布する徒歩圏外地域では、公共交通の利用が制約され、徒歩や自転車による通学、あるいは保護者による自家用車送迎が行われていると考えられる。特に市南部および西部の一部エリアでは、通学対象者数が一定程度存在するにもかかわらず、公共交通へのアクセス条件が十分とはいえない状況を確認できる。

また、冬季の降雪や悪天候といった地域特有の気象条件を考慮すると、徒歩や自転車による通学は安全面でのリスクを伴う可能性があり、通学手段の柔軟性が求められる。

以上より、高岡市における通学環境では、公共交通が一定の役割を果たしているものの、学校立地や人口分布、環境条件によっては十分に対応できないケースも存在し、公共交通の有効性は立地条件に左右されているといえる。

4. 通院環境

通院は高齢者を中心に定期的に発生する生活行動であり、移動手段の確保は健康維持に直結する重要な要素である。

図3に示すように、中心居住誘導区域内の医療施設の多くは、小規模な駐車スペースしか有していない。特に診療所や中小規模の病院では、駐車場の収容台数が10～30台程度にとどまっており、十分な駐車容量が確保されているとは言い難い。一部の総合病院では100台を超える駐車場を備えているものの、こうした施設は限られている。

このような駐車場整備状況を公共交通の徒歩圏とあわせて考えると、中心市街地に立地する医療施設では、自家用車によるアクセスが必ずしも容易ではない一方で、公共交通による来院が現実的な選択肢となっていることがうかがえる。特に、公共交通へのアクセスが比較的良

好な施設では、通院手段として公共交通が一定の役割を果たしていると考えられる。

以上の分析から、中心居住誘導区域内における通院環境では、駐車場制約という空間的条件の下で、公共交通が補完的な移動手段として機能していることが示唆される。

5. まとめ

本研究では、富山県高岡市を対象として、「買い物」「通学」「通院」という三つの日常生活環境に着目し、公共交通がそれぞれの行動環境においてどの程度有効な移動手段として機能しているのかを検討した。

分析の結果、買い物環境においては、多くの施設が自家用車利用を前提として立地・整備されており、公共交通が主要な移動手段となる可能性は限定的であることが明らかとなった。一方、通学環境では、公共交通が一定の役割を果たしているものの、学校立地や気象条件などにより、公共交通のみでは十分に対応できないケースも確認された。また、通院環境については、中心居住誘導区域内において、医療施設の立地条件や駐車場制約を背景として、公共交通が通院手段として一定程度機能していることが示唆された。

以上より、地方都市における公共交通の有効性は一様ではなく、生活行動の性質や施設立地条件によって大きく異なることが明らかとなった。公共交通の役割を検討する際には、ネットワークそのものだけでなく、生活環境との関係性に着目する視点が重要である。

今後の高岡市では人口高齢化が進み、ますます交通弱者が増えていくことが予想される。特に買い物における自動車から公共交通機関への移行が進まない、高齢者の生活環境が悪化してしまうと予想される。通勤や通学による移動が少なくなっていく中、どのように公共交通を維持するのか課題になっている。

(グ カセイ：2026年3月本学研究所・博士課程前期課程修了)

2025年9月30日から10月4日まで、実習で愛媛県松山市へ行ってきました。いくつかの班に分かれての調査活動だったのですが、私は総勢4名の自然班として参加しました。松山市の地図を見ると中心部は都市化が進んでいますが、その市域は非常に広く、少し郊外に目を向けるとため池や田畑が広がっています。そして平野部にも山間部にもため池があります。松山市は瀬戸内式気候で雨が少なく、また瀬戸内海を河口とする大河がないのでため池が必要だからでしょう。実は私の住んでいる島本町にもため池があるのですが田畑が宅地化によってほぼ消滅し、ため池存続の問題があります。役割を終えつつあるため池をどうやって管理するかというのはあまりニュースにはなりません、そこには防災、自然、景観などの問題が潜んでおり、もう少し知識を深めたいという問題意識がありました。また、班メンバーの一人であるMさんが景観について、どういった要素があり、住民たちがどのような認識をもっているのかということに関心を持っているということで、平野部である志津川町と山間部である久谷地区について調べることになりました。久谷地区には四国八十八か所の一つである浄瑠璃寺と八坂寺があり、お遍路さんや地元の人たちの景観認識も調べることになりました。

9月30日にJR松山駅を降りると、なんと高架駅になっていました。私は観光で2021年に松山に来ているのですが、その時は旧駅があったはずですが、見ると旧駅が完全には取り壊されずにプラットフォームや駅舎の一部が残っていました。これはぜひ残して欲しい。貴重な観光資源になると思いきなり興奮して大量の写真を撮りました。駅西はまだほとんど建物はなく、駅も新しいのですがそれほどぎわっている感じはしませんでした。これからということでしょうか。

集合時間になり市電に乗ってヒアリングのため市役所へ。松山市といえば市電の町。しかし運行頻度がやや少ないような気がしました。やってきたのは元京都市電です。小学生の頃に一度だけ京都市電に乗ったことがあり



写真1 松山市役所でのヒアリング

ますが、ほとんど覚えていないので懐かしいという感情はないのですが今も現役というのはすごいことです。

市役所の職員の方から最初に第7次松山市総

合計画の概要について説明がありました(写真1)。どこでも言えると思うのですが、人口減少対策が最重要事項のようです。人口増減のグラフを見ると20~24歳で社会減が非常に大きい。多くの若者は進学や就職で転出するという実態があるとのこと。JR松山駅周辺の再開発については松山市にとっては大事業で駅の西側にはアーリーナの計画があるとか。松山は伊予電の松山市駅の方が活気があるイメージなのですが、アーリーナなどの再開発事業が行われて、JR松山駅と松山市駅との関係が逆転するのか、あるいは共に栄えるのか数年後にまたみてみたいものです。今はフェスが主流で、そういう意味ではアーリーナはいいのかもしれませんが、10年後、20年後どうでしょう。開発費や維持費との兼ね合いで難しい判断と思います。総合計画では「節水型都市づくり」や「水の無駄遣いをしない」といった文言もあり、水が貴重である地域というのは農業だけの問題ではなく、市民の共通認識にもなっているのだと思いました。総合計画のあとは、個々の班に対しテーマにそった部署の職員の方から非常に詳しい説明をしていただきました。

二日目は志津川町に行きました(写真2)。ここは松山市の北部にあり東西の丘陵地に挟まれています。北上



写真2 志津川池

すると海に行き着きます。宿泊している松山市中心部からは伊予鉄バスが比較的頻繁に運行されて便利なところです。ため池も水田も多いですが(畑は少ない)、国道沿いにはおなじみの全国チェーンのお店がずらっと並んでいて典型的な郊外風景となっています。ここでは志津川土地改良区の方にお話を聞く事ができ、志津川池という改良区が管理しているため池も実際にみながら解説して頂きました。やはり高齢化と農家の担い手の減少が不安要素であり、実際の管理作業でも人が減って一部の人に負担が集中して大変なようです。話を伺った土木係のIさんには、大雨で増水している時に堰を動かそうとして川に落ちたというエピソードを話していただいて、命がけで水の管理をしていることに驚いてしまいました。少子高齢化とはいうものの、水田はまだまだ健在で、水田がある限りため池がなくなることはないということでした。少雨のため、川の水だけではすべての水田に水をいきわたらせることは不可能と強調されていました。

三日目は住民アンケート。一部、現地の景観を写真で撮ってそれを見せながら答えてもらうというアンケートを作成しました。ほんとうはたくさんの方が集まるところで一気にアンケートを取りたいところですが、志津川土地改良区のO会長に何うと、みんなで集まることは私たちの滞在中はないとのこと。地域の大きな行事である秋祭りは我々が大阪に帰った後に行われます。そこで隣の鴨川という区域にある公民館にアポなしでお邪魔をして、公民館の職員さんと、体操教室に20名ぐらいおられた方々にアンケートをお願いしました。突然の来訪でしたが快く受けていただき助かりました。

これだけでは数的に心もとないですし、サンプルの区域的、あるいは年代的片寄りもあるので家を一軒一軒まわってアンケート取りを試しましたが、平日の昼間は誰もいません。先日、O会長は、このあたりはほとんどが兼業農家だと言っておられたのですが、本当にその通りで昼間は働きに出て不在なのです。10軒に1軒ぐらいは人がいるのですが、最近はどうも仕方がないのですが、関大の学生で調査をしていると言っても出てきてくれません。私が逆の立場でも出ないですから、アンケートを書いてくださいというのは虫のいい話です。公園で子どもを遊ばせている保護者の方にも声を掛けましたが警戒されて答えてもらえず。だいたい1時間に一人ぐらいのペースで回答をいただきましたがあまりにも効率が悪すぎます。後で知ったのですが、団地を調べているグループはQRコードを印刷したチラシをポスティングしたとのこと。アンケートを工夫して、そうする方がよかったのかなとも思いました。改良区のヒアリングでは年配の方が非常に多いと聞いていたので、QRコード読み込みからスマホ画面で回答というのはこの地域ではハードルが高いかもしれません。アンケートの字が細かくて読めないとおっしゃる高齢の方もおられました。アンケートのフォントサイズや、紙面構成などももっと深く考えて作成する必要があることを改めて感じました。

他に気づいたこととして集落と水田には細い生活道が縦横に走っているのですが、クルマの多さに驚きました。歩いている人や自転車はめったにみません。狭い集落の道なのでみなさん近隣の方と思うのですが、移動は高い頻度でクルマを使っているようです。志津川町は平坦で自転車でも楽だと思うのですが、想像以上にクルマ社会でした。アンケートの結果をみてもロードサイドにいろいろな業態の店があるということの利便性を高く評価されていました。それもみなさんクルマで行かれるのでしょう。近所なので渋滞もなく、時間もかからないのでよいのだと思います。ロードサイドに立ち並ぶ全国チェーンの店舗群を見て、全国一律で個性のない風景という評価もよく目にしますが、地元の人たちにとっては便利なインフラで非常に助かっているのです。

アンケート後はため池から水田に水を引き込む水路網

について目視で調べました。すべての水田に水を行きわたらせるようにたくみに水路が引かれており、一見すると平らな水田同士も微妙な高低差が付けられています。これは管理体制も含めてりっぱな水路技術というべきものでしょう。水田や集落が川より低い位置にあり、内水氾濫に備えて排水用のポンプもありました。ため池の内側の法面のコンクリート補強などきちんと行われていて防災もよく考えられていると感じました。あいにくこの日は雨で、こういう時にフィールドノート、地図、傘、カメラやスマホを持って、時々メモをするということをやっていると服はすべて濡れ、地図もよれよれになり、ボールペンにも水がかかってうまく書けず苦労しました。しかし涼しいので体力の消耗も少なく、一人で水路と水田を観察しながらひたすら歩いていると俺は志津川町の道については地元民よりも詳しいのではないかという大胆な考えも浮かび、気分も高揚してきて楽しくなってきました。お遍路さんもひたすら歩いてそういう気持ちになるのかもしれない。一段高くなったため池の堤から広々とした周囲の水田や集落や丘陵地帯を見渡すことができ、気持ちいいのどかな風景と市中心地までのほどよい距離、ロードサイドの便利なお店などを考えると住みやすそうなところだと思いました。

四日目は志津川だけではなく、せっかく来たので中心部から南部の山あいにある久谷エリアも見ただけは見ました。同じ松山市内とは思えない山間の風景が広がっていましたが、一部のため池のすぐ下に住宅があり、他人事ながら防災面で心配してしまいました。浄瑠璃寺に行くとき本堂の建物には様々な装飾が—例えば猿、獅子、龍などですが、細部まで凝った造形であり、実に興味深く、たくさん写真を撮りました。勉強不足でよくわからなかったですが、装飾それぞれに意味や歴史的な経緯などがあり、知識があれば楽しめるのだろうなと思いました。白装束の人たちが参拝をしており、本当にあのような服装で周るのだと少し感動しました。その人たちはクルマで周っているようでした。巡礼用の観光バスも行き来しており、その一方ですべて歩きとおすという人は、容易に手に入る便利さをあえて拒否して、なみなみならぬ思いをもって巡礼をしているのだろうと想像を巡らせていました。

4日間という短い時間ではありましたが充実した日々であり、他の班メンバーも多くのお会いがあったようです。地元の方、道行くお遍路さん、市職員の方にもたいへん親切にいただきました。四国にはお接待の文化というのがあって、根底にそのような文化が息づいているように思いました。この場を借りて助けていただいた松山のみなさまならびに、全体のアレンジやレンタカーの運転に奔走していただいた先生方に感謝いたします。

(こうとう たかし：学部3年生)

**2025年度
卒業生・修了生
からのひとこと**

〈卒業生〉

浅野まゆ
3年間地理学専修でいろいろなところを歩いて、いろいろな体験ができました！3年間ありがとうございました！
^^

東 祐輝
巡検などを通して素敵な仲間や先生方との出会いがありました！3年間お世話になりました。

磯 翼
フィールドワークや課題を通して、多くの知見を得ることができました。3年間お世話になりました。

上野桜祐
授業や巡検から多くの学びを得ることができ、地理学専修に入って本当に良かったです。お世話になりました。

奥田文香
会津若松市での実習をはじめ、調査方法やアポの取り方など学びになりました。3年間ありがとうございました。

海原紬希
フィールドワークを通じて今までと違う視点で訪れる場所を見れるようになり、歩く楽しさが増えました。

加藤由衣
3年間、各地でのフィールドワークを通じて、地理を学ぶ面白さを実感できました。ありがとうございました。

亀井珠菜
念願の地理学を実践的に学び、学びも人との出会いも豊かな学生生活を送ることができました！

大学院生の研究業績 (2025年4月～2026年3月)

【論文・書評・書籍等】

- 前谷駿輔 「(書評) 橋本道範編『自然・生業・自然観－琵琶湖の地域環境史－』」史泉, 第142号, 52-56頁, 2025年7月
- 前谷駿輔 「景観特性と訪問者の景観認識に基づく巡礼路の価値認識－高野参詣道町石道を事例に－」史泉, 第143号, 1-13頁, 2026年1月
- 肖 逸欣 「中国のコンビニにおける“便利さ”とは：日本のコンビニと比較しながら」史泉, 第143号, 25-43頁, 2026年1月
- 前谷駿輔 「(書評) 阿部美香著『歌川広重の声を聴く－風景への眼差しと願い』」史泉, 第143号, 44-47頁, 2026年1月
- 楊 瑠屹 「宮古諸島の聖地・パワースポットに関する考察－大神島とスピリチュアルツーリズムの視点から－」千里山文学論集, 第106号, 2026年3月(刊行予定)

【学会発表・研究会発表】

- 楊 瑠屹 「沖縄県国頭郡今帰仁村謝名における集合的記憶の空間構造－SCATによるインタビューの共同想起のテーマ分析を通じて－」東西学術研究所 研究例会〔集合知・共同的記憶研究班〕(口頭発表), 2025年7月28日
- 前谷駿輔 「巡礼路の景観と価値認識－高野参詣道町石道を事例として－」2025年人文地理学大会(口頭発表), 2025年11月16日
- 楊 瑠屹 「今帰仁村謝名における認知地図を利用した空間構成の可視化分析」2025年人文地理学会大会(口頭発表), 2025年11月16日
- 王 競東 「企業城下町における産業遺産の保全と活用に関する研究－新居浜市を事例に－」2025年度関西大学史学・地理学大会(口頭発表), 2025年12月6日
- 佐伯雅優美 「地理総合必修化にともなう高等学校における地理教育の変化」2025年度関西大学史学・地理学大会(口頭発表), 2025年12月6日
- 前谷駿輔 「絵図に基づく巡礼路の価値認識－高野参詣道を中心として－」2025年度関西大学史学・地理学大会(口頭発表), 2025年12月6日
- 前谷駿輔ほか「愛媛県松山市の自然環境と人文環境1」2025年度関西大学史学・地理学大会(ポスター発表), 2025年12月6日
- 熊 偉超 「特別豪雪地帯における冬季の買い物弱者問題についての考察」2025年度関西大学史学・地理学大会(口頭発表), 2025年12月6日
- 熊 偉超ほか「愛媛県松山市の自然環境と人文環境2」2025年度関西大学史学・地理学大会(ポスター発表), 2025年12月6日
- 熊偉超・前谷駿輔「愛媛県松山市の自然環境と人文環境「－地理学・地域環境学「愛媛県松山市実習調査」中間報告－」第7回千里地理学会(口頭発表), 2025年12月13日

2026年度教室行事予定 (2026年4月～2027年3月)

- 4月9日(木) 専修オリエンテーション A-601 教室 12:15～13:00
- 4月23日(木) 新歓コンパ
- 5月9日(土) ～10(日) 一泊バス巡検 和歌山市・橋本市方面 土屋・筒井担当
- 7月5日(日) 大学院M・D入試(秋学期入学), 春学期大学院M学内進学試験
- 7月18日(土) 大学院合同演習(千里山キャンパス)
- 9月18日(金) 春学期卒業式・修了式, 秋学期入学式
- 10月1日(木) 卒業論文中間発表会
- 10月4日(日) 日帰り巡検(大津・山科方面) 卒業生も参加可能, 土屋・筒井担当

- 10月6日(火) ～10月10日(土) 地理学実習調査(三重県桑名市予定) 土屋・筒井担当
- 10月11日(日) 大学院M・D入試, 大学院M学内進学試験
- 12月5日(土) 関西大学史学・地理学会大会(関西大学) 卒業生も参加可能
- 12月12日(土) 第8回千里地理学会大会(関西大学) 卒業生も参加可能
- 2月20日(土) 大学院M・D入試, 大学院M学内進学試験
- 3月19日(金) 卒業式
- 3月20日(土) 学位授与式

■ □ 学窓から □ ■

私の眼に映る地理学

郝 玉朋

私の出身は中国・山東省済寧市^{さいせい}である。5歳頃、両親とともに遼寧省瀋陽市へ移り住み、高校三年までずっと瀋陽市で生活してきた。2018年3月に17歳の私は留学生として日本に渡った。そこから約8年間にわたる一人暮らしが始まった。

来日後は神戸で2年間の日本語学校に通い、日本語と日本での生活に少しずつ慣れていった。2020年には兵庫県西宮市にある大手前大学へ進学し、4年間の学部生活を送った。学部で日本語と日本文化の学びを進める中で、次第に自分の故郷を流れる京杭運河^{けいこう}に強い関心を抱くようになった。この関心をきっかけに、大手前大学の于亜先生の助言を受け、関西大学大学院の地理学専修へ進学し、研究を深めていくことを決意した。

2024年4月から土屋先生のゼミに所属し、経済地理学の視点から京杭運河および内河港湾における石炭輸送について研究を行い、2026年1月に修士論文を提出することができた。

大学院に入学してから、地理学を本格的に学び始めた。最初は分からないことも多く、不安を感じることも少なくなかった。しかし、様々な講義と野外巡検を重ねる中で、徐々に地理学の考え方を理解できるようになった。また、日々の授業を通して、QGISやMANDARAなどの地理情報ソフトの操作方法、地図の読み取り方などの技術を身につけることで、地理学への認識が次第に明確になっていった。

特に印象に残っているのは、2024年10月に行われた会津若松での実習調査である。この実習調査では、私は会津若松地域における水系開発をテーマに調査を行い、周辺の河川や山地を実際に歩いて確認した。さらに、会津盆地の水源である猪苗代湖を訪れ、標高約500メートルに位置する断層湖という地理的に非常に特徴的な構造を、自分の目で確かめることができた。この調査を通し

て、猪苗代湖および周辺の引水・水利施設が、地域の農業灌漑にとって極めて重要な役割を果たしていることを実感した。

巡検期間中には、同級生とともに鶴ヶ城で開催された『会津清酒で乾杯』というイベントにも参加した。当地の米と水によって醸された地酒を味わうことで、会津地域における「水」の価値を、学術的な視点だけでなく、生活文化の側面からも理解することができた。

そのほかにも、丹波篠山や大和郡山などでの巡検に参加した。こうした現地調査を一つ一つ積み重ねる中で、日本、特に関西地域の地理的特徴への理解が深まっただけでなく、地理学が他の学問分野にはない魅力を持つことを強く感じるようになった。

大学院での2年間の学びを通して、地理学は決して特別な場所だけに存在する学問ではなく、私たちの日常生活の中に常に存在しているものであると感じている。自然地理、経済地理、歴史地理といった多様な分野が相互に関わり合いながら成り立っており、地理学の視点から社会現象や自然現象を分析することで、より生活に近い、実感を伴った結論を導き出すことができる。その点にこそ、地理学の大きな意義があると考えている。

(カク ギョクホク：博士課程前期課程 2026年3月修了)

木下康太
地理学専修では自分の足でデータを得る重要性を学びました。ありがとうございました。

後藤祥次郎
仲間と共に新たな知見を得る機会が多く楽しく充実してました。ありがとうございました。

後藤 爽
旅行好きで、旅行の解像度を上げられたらと思い、地理学に入って期待通り多くの知見を得ることができました。

品川 蒼
未だに地図の読み方はわかりませんが、少しでも地理に興味を持ってよかったです。

杉本珠美
地理学専修に進んでからの約3年間はとても濃い時間を過ごしました。まだ地理学の世界には残ります。

須田明日香
専修での学びを通し防災への興味が深まりました。先生方をはじめ関わった皆様に感謝します。

巽 愛華
先生方や地理学専修の仲間たちに支えられ、充実した大学生活を送ることができました。本当にありがとうございました。

田中悠介
元々地理学専修に決めて入学したわけではないですが、やりたいことが十分にできました。

田村昌工
本当に楽しく貴重な4年間をありがとうございました。地理学専修でよかったです！

丹 悠真
巡検先での友人や先生方との何気ない時間はとても楽しかったです。本当にありがとうございました。

中川詩織
フィールドワークが楽しく、実際に現地へ行き、自分の目で見ることで、多くの新しい発見がありました。

中所ごまち
地理学専修で過ごす3年間はあっという間でした！充実した日々をありがとうございました。

鍋倉夕葵
現地調査を通じ実際に足を運ぶことの大切さを学びました。興味のある分野を地理学で学んで楽しかったです。



『会津清酒で乾杯』の写真

関大地理同窓会 令和7年度会計報告

(収入)	(円)	(支出)	(円)	(収支残高)	(円)
一般年会費 (4名)	8,000	事務局雑費	272	前年度繰越金	554,718
新入生会費 (40名)	40,000	事務局アルバイト	8,000	収入 - 支出	92,728
卒業生会費 (23名)	46,000	計	8,272	計	647,446
寄付 (2名)	7,000				
計	101,000				

*千里地理通信 92・93号の印刷代・発送代は大倉基金から支出した。

林 大耀

ゼミ活動としては2年間でしたが、本当に濃い時間を過ごすことができました。実習や卒論をやり終えられたのは、偏り周りの方々のおかげだと思います。本当にありがとうございました。

福田穂香

大変なフィールドワークも振り返るといい思い出で、この専修を選んで良かったです。

古市美咲希

地理学専修で行った場所、出会った人は全部宝物です。3年間本当にありがとうございました！

三好彩香

地理学を学んだ時間は、地図のように私の進む道を広げてくれました。ここで得た学びを次のステップにつなげます。ありがとうございました！

村上洗基

ひよんなことから地理学を専修し、人生計画にない体験をし、それを糧に今があります。面白いものですね。

吉田太陽

地理学で培った多角的な視点を就職先でも活かします。3年間ありがとうございました。

渡邊太陽

地理学について、楽しく学ぶことができました。ゼミの皆、教授方、今までありがとうございました！

〈同窓会事務局ニュース〉

- ・12月13日(土)に関大地理同窓会総会を開催し、2027年までの会長ほか役員の方の委嘱、中間会計報告が審議され承認されました。
- ・関大地理学教室の卒業生である次の方々から寄付をいただきました。大倉 俊, 吉兼 崇博 (50音順, 敬称略)。
- ・今年度の卒業生の主な進路は以下の通りです。JR 東海, JR 西日本, ベッセルホテル開発, 関西大学大学院, 京都大学大学院 (50音順・公開許可分のみ)
- ・2025年度同窓会連絡員に東 祐輝さん, 杉本珠美さんが選ばれました。
- ・同窓会通信の執筆寄稿を募集しております。1ページ1600字程度, 半ページ800字程度, 写真等も可です。執筆いただける方は教室メールアドレス [kandaichiri@gmail.com] までご連絡ください。また, 会費の納入状況などのお問い合わせも上記メールアドレスにお願いいたします。

役員一覧 *任期は全て2年

【会 長】三好唯義

【協 議 員】石川雄一, 上野 裕, 小野田一幸, 鈴木応男, 埴田祐子, 辻 康男, 西岡尚也, 東出修一, 舟越寿尚, 堀内千加, 松田順一郎, 吉兼崇博, 吉田雄介, 矢野司郎

【幹 事】木場隆弘, 齋藤鮎子, 田中優生, 直 暁陽, 中井香月, 松井僚平, 安田えり

【会計監査】中島 茂, 矢嶋 巖

【顧 問】渡邊 登

【事務局長】松井幸一

大倉基金の活用について

今年度の大倉基金は主に以下の項目に使用させていただきました。

- ・大型スキャナ・印刷機の導入
- ・国際交流プログラム派遣(ベトナム研修)のプログラムフィー, 引率費用の一部補助
- ・ベトナム国家大学ハノイ校教員による講演
- ・実験室・資料室整理のための人件費(学生アルバイト)

* 関大地理同窓会へ ご寄付のお願い

関大地理同窓会の全ての活動は現役生と卒業生の会費で実施しています。継続的な同窓会活動のため皆様からの寄付を募っています。賛同していただける方は振込時の名前欄に「名前+寄付」または「名前+会費・寄付」としてお振り込みください。

教室創設60周年記念事業

2027年に地理学教室は創設60周年を迎えます。教室・同窓会は共同で60周年記念事業を開催予定です。

1. 60周年記念パーティーの開催

2027年12月11日(土)に60周年記念パーティーを予定しています。詳細は決まり次第「千里地理通信」とHPでお知らせします。

*パーティーにご参加いただける方には『千里地理成長期4』をお渡しします。

2. 『千里地理成長期4』の刊行

2020年以降の教室の記録と卒業生からのエッセイを掲載した『千里地理成長期4』を刊行予定です。詳細は下記「『千里地理成長期4』の原稿募集」をご覧ください。

* 『千里地理成長期4』の原稿募集

『千里地理成長期4』の刊行に向けて卒業生の皆様からの原稿を募集します。

体 裁: A5サイズ

執筆要項: 1頁あたり33字×33行

分 量: 1人あたり2頁まで。写真の入れ込みも可。

原稿提出期限: 2027年6月30日

刊行予定: 2027年12月

提 出 先: google フォームまたは教室メール

google フォーム <https://forms.gle/jpRHqmjiGYEeCA5s8>

教室メール kandaichiri@gmail.com

*アップロードにはgoogleアカウントでのログインが必要です。

教室だより

■卒論中間発表会

9月25日(木)9時10分から17時までA棟301会議室で実施しました。発表者は卒業論文を提出予定の29名でした。

■秋の日帰り巡検

9月28日(日)に秋の日帰り巡検が開催されました。「西宮と宝塚の自然と人文」というテーマで、電車を乗り継ぎながら、徒歩でまわりました。西宮市立中央公民館での説明(9:30より)～阪急西宮北口周辺～阪急西宮ガーデンズ(昼食、各自)～宝塚駅周辺～宝塚市立文化芸術センター前で説明・手塚治虫記念館を見学～宝塚市立文化創造館～清荒神参道商店街～現地解散。OBの吉兼崇博さんが参加されました。参加者は計71名。

■地理学・地域環境学実習

9月30日(火)～4日(土)に実習調査を愛媛県松山市で実施しました。3年次生29名、博士前期課程1年次生2名、ティーチングアシスタント1名(虞嘉誠)、教員2名(筒井・土屋)の計34名の参加でした。その実習報告書『愛媛県松山市の地理』が2026年3月に刊行され、4月に全国の地理学教室や関係者・関係機関に発送の予定です。

■ベトナムフィールドワーク研修

2026年3月6日(金)～3月14日(土)に、教員(黒木、筒井、土屋)引率のもと、12名の学生・院生がベトナムフィールドワークに参加しました。今年はホーチミンとメコンデルタに出かけ、トゥーザモット大学とカントー大学を訪問しました。そして、2026年3月18日(水)～3月26日(木)には、ベトナム国家大学ハノイ校の先生・大学院生・学生の合計12名の皆さんが来日される予定です。3月23日には関西大学で合同セミナーを実施します。昨年度と同様に、双方向の国際交流を進めています。

■第7回千里地理学会大会・卒論セミナー

12月13日(土)第1学舎E602会議室で、12時から13時まで現3回生を対象に卒論セミナーを開催しました。担当は筒井教授でした。そのあと14時から17時まで、同じ教室で、第7回千里地理学会大会を開催しました。

発表題目は以下の通りです。大学院生(熊偉超・前谷駿輔)「松山市実習調査中間報告」、松井僚平(関西大倉高校・教諭)「現職教職員からみる地理学」、石川雄一(大阪商業大学・教授、本学非常勤講師)「都市圏の縮退に伴う都市圏縁辺の通勤流動パターンの変化」。懇親会は新関西大学会館南棟3Fレストランルコロで実施しました。

■集中講義の実際

2026年1月22日(木)、23日(金)、26日(月)、27日(火)に大学院博士前後期課程向けの「歴史地誌学特殊研究」に山元貴継先生(琉球大学)にご出講いただきました。

2026年1月23日(金)、24日(土)、26日(月)に大学院博士前期課程向けの「自然地理学特別研究」に川瀬久美子先生(愛媛大学)にご出講いただきました。

■教員の国外出張(2025年10月～3月)

筒井由起乃:ベトナム2025年10月24日～27日(ベトナム学国際会議に出席)。黒木貴一:スリランカ2026年2月24日～3月3日(災害復旧調査)。黒木貴一:ベトナム2026年3月6日～14日(フィールドワーク研修引率)。土屋純:2026年3月6日～14日(フィールドワーク研修引率)。筒井由起乃:ベトナム2026年3月6日～14日(フィールドワーク研修引率)。

■2026年3月の卒業生・修了生・学位取得者

本年度の卒論提出者は29名、大学院博士前期課程の修了者は4名です。全員が卒業予定です。卒論・修論題目は秋号に掲載します。2026年2月9日に実施した口頭試問の結果、杉本珠美さんの「モスクの個性化とムスリムのモスク選択一神戸市における二つのモスクの比較から一」が最優秀論文となり、卒業式のときに学部長表彰をうけます。

■2025年度日本地図学会論文賞

黒木貴一教授が、日本地図学会の論文賞を6月に受賞しました。受賞対象論文は「地形変化を判読するための剰余地図とその特性」(地図, 61巻, 30-38ページ)。

鎌田優大

ベトナムでの研修旅行や巡検など何物にも代え難い経験ができました。今後も地理学教室が末長く続いていくことを願っております。

〈修了生〉

于凡茜

この三年間、地理学の視点で「気になること」を追究してきました。先生方にご感謝申し上げます。

王競東

「産業遺産と地域創生」に惹かれて地理に入りました。先生の方々に恵まれて、充実した2年を過ごしました。

郝玉朋

関西大学での二年間、人生と地理に対する見方が新しくなり、この二年間は私にとって最高の日々です。

虞嘉誠

二年間お世話になりました。ご指導くださった先生方に心より感謝いたします。これからも頑張りますよ！

佐伯雅優美

全く地理に触れてこなかった私がまさか地理学専修に入学するのは！たくさんの方々に感謝！

新専修生からのひとこと

大学院(秋学期入学)

藤井 純

(博士前期課程)
紆余曲折ありて、また悔の研究をしております。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

于子然

(博士前期課程)
初めまして、土屋ゼミの于子然です。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。

愛媛県松山市の地理 地理学実習報告書 (50)

はしがき

- I 地域の概観
- II 松山市近郊における平地と山間部の地域資源の役割 - ため池と四国遍路を事例に -
- III 松山市における食・農業の新たな動き
- IV 忽那諸島における地域維持 - 忽那諸島から松山市の未来を考える -
- V 松山市西部郊外地域における工業の変動と買い物環境
- VI 松山市のニュータウン
- VII 松山市中心市街地の実態

VIII 松山市における観光の実態

IX 松山市都市圏における地域交通の現状と課題

- 各章の要旨
- 調査日誌
- 編集後記
- 関西大学史学・地理学会2025年度大会ポスター発表資料
- 英文目次
- 奥付
- 全215頁

私は2023年度から関西大学文学部の「村落地理学」を担当しています。講義では、できるだけ具体的に村落のすがたとそれを理解するための視点についてお話しています。今回は、学外研究(2024年4月~9月)でドイツのルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン(LMU ミュンヘン大学)に滞在した体験についてまとめます。留学などをしたことがなかった私にとって、今回の経験は新しい挑戦の一歩でした。

2024年初夏に、ハイデルベルク大学に在籍していたヨハネス・グリュックラー先生にメールをすると、面識のなかった私の依頼を快く受け入れてくださいました。先生は秋からミュンヘン大学への異動が決まっており、そちらで良いなら受け入れられるとの返事でした。2024年秋のドイツ地理学会(フランクフルト大学)に参加して先生に挨拶をし、フィールドワークの候補地の視察と、半年間滞在する部屋の下見をしました。

2025年4月にドイツに渡り、大学では先生方と大学院生の皆さん、事務職員の方々に優しく迎えていただきました。PDのフィリップさんには研究室をシェアしていただき、机と通信環境を自由に使える環境を得ました。ヤニックさん、ヤコブさんをはじめとする院生や研究員の皆さんには、いつも親切に声をかけてもらい、楽しい時間を過ごすことができました。ミュンヘン大学は都市内分散型のキャンパスで、私の滞在した建物には地球科学部が単独で入居していました。

4月のゼミで研究紹介をした際、農村のコミュニティに関心があることを話すと、ドイツでは消防団が盛んであることを教えてもらいました。また、鉄道(普通列車)、地下鉄、バスなどの公共交通機関を定額(当時は49ユーロ)で利用できる「ドイツランドチケット」があり、住民登録をして利用することができました。そこで、ミュンヘンから北東にあるバイエルン森林鉄道で移動し、Gottzell(ゴットエスツェル)という小さな駅で降りてみました。消防団の事務所では、訓練前の団員の方々と話すことができました。村では6月に夏至を祝う祭りがあることが分かり、その手伝いをしたいと伝えて承諾を得ました。日本でこれまで行ってきた、「何か地域の行事を手伝ってみる」という方法を実践することに決めました。

祭りでは、たいまつを組み上げる作業などを手伝いました。点火の際、総務部長のフロリアンさんが私の調査について村の皆さんに紹介してくださいました。祭りではビールやソーセージが提供され、その収益が消防団の活動資金となっています。たくさんの方が飲食と歓談を楽しんでおり、その後の聞き取りでも「祭りへの参加は消防団へのサポートだ」と話す人がいました。消防団の

訓練の見学も行い、日常的な活動の実態を知ることができました。ドイツの消防団は日本と比べて活動の幅が広く、交通事故など日本では警察が担当するような事象でも出動します。大きな都市以外には公的な消防署がなく、小規模な町村は消防団が助け合って活動をしているようです。また、クラブ活動が盛んで、消防団もクラブの一つに位置付けられていました。

村に移住して馬と暮らすライナーさんには、牧草の収穫作業に誘ってもらいました。近隣の4世帯ほどの方が手伝いに来ており、一緒に作業をしました。夕方に作業が終わると、お礼にビールとパン、チーズなどが振る舞われました。こうした交流について、近所の方は「Dorfgemeinschaft! (村のコミュニティだね!)」だと教えてくださり、現地でのコミュニティのあり方を考えるきっかけになりました。

村長さんへの聞き取りでは、院生のヤニックさんが同行してくれたので、円滑に進めることができました。その後の調査では、事前にアポを取ったり、歩いていて出会った方に声をかけたりして、調査票を用いて50名程度の聞き取りをしました。相手が英語を話す場合は英語で、ドイツ語のみの場合は調査票を見せながら質問を読み上げ、回答を録音しました。私がドイツ語をあまり話せないと伝えると、「私たちもドイツ語は話さないよ、ここはバイエルンだ、バイエルン語しか分からないね」とユーモアのある返答をされることが何度かありました。

日本に戻る前には、フィリップさんによるドライブでのミュンヘン郊外の案内、研究室の皆さんによるお別れ会のほか、グリュックラー先生が自宅に招いてごちそうして下さるなど、最後まで親切にいただきました。帰国後も、ヤニックさんが京都に旅行に来たり、村の皆さんからFacebookで写真やメッセージをいただくなど、交流が続いています。

今回の滞在中を通して学んだのは、挑戦すること、比較により視野を広げること、自身の蓄積を最大限生かすことの大切さです。私が取り組んだことは一つずつ小さなことばかりですが、その積み重ねが実を結ぶよう、今後も楽しみながら研究を続けていきます。

(てらとこ ゆきお:立命館大学文学部准教授)

千里地理通信 第94号

2026年3月18日 発行 (300部)

関西大学地理学・地域環境学教室
関大地理同窓会

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35

関西大学文学部地理学・地域環境学教室内

編集担当:黒木貴一・前谷駿輔

TEL:06-6368-1121(内線4890:大学院生室)

e-mail:kandaichiri@gmail.com

http://www2.kansai-u.ac.jp/kugeoenv/

郵便振替:大阪00970-4-81149

*教室の最新情報、過去の千里地理通信はQRコード先の教室HPからご覧いただけます。

